

## 「戦争と平和！」第1回

## 遺 骨 迎 え

松本 タケ子

村に汽車が通るようになって間がない日、通学班の小学生の私達は先生に連れられて、学校に程近い駅前に並んでいた。私は一年生だったから、友と最前列にいた。風の強い日で駅前に張られた白黒の幕が千切れそうに、はたはた鳴っていた。大きな汽笛



宮口付近を行く蒸気機関車

の音と共に汽車が滑りこんで来た。やがて、新しい改札口を通して、お婆さんと二、三人の男の人が降りてきた。お婆さんは、白い布に包まれた四角の箱を首に下げていた。皆の前に歩いて、深いおじぎをした。私達も最敬礼をした。ちょっと男の人の話がいった後、キミズカ先生がタクトを振り、練習してきた「♪ 命を捨てて、マスラオが、たてしいさおはあめつちの・・・」と歌った時、キミズカ先生が泣き崩れた。子供たちは啞然として歌えなくなった。そのまま、しばらく無言が続いた。その後、キミズカ先生には学校で会う事はなかった。出征したのかもしれない。

遺骨の箱を首に下げたお婆さんを先頭に、私達はずっと続く田んぼの中の道を歩いた。右側に見えてきた古戦場の三方原大地に、大きな、大きな、真っ赤な夕日があった。唯、皆が履いている藁草履の音だけがひたひたと続いた。かなり歩いてお婆さんの家に着いた。外庭に並んで、家の中の台に安置された箱に、上級生の号令で礼をして、薄暗くなりかけた道を家に帰った。

遺骨迎えをしたのは、たった一度、この時だけだった。今考えると列車開通のイベントだったのだろうか。家の廻りを見廻すと、父、夫、子供が戦死した家が何軒もあったが遺骨迎えをした覚えがない。

戦況がどんどん厳しくなり、田舎にも警戒警報、空襲警報が多発されるようになり、他家に気を配る事ができなくなった。その後、戦死者がどのように家に帰られたのか、遺族はどんな日々を送られたのか、考えられなかった。決して平坦な日々ではなかっただろう。たった一枚の召集令状で、穏やかな日常が断ち切れ、戦死の報にも泣く事もできず、耐える事しかない日々だっただろう。

八月十五日、天皇陛下の一言で戦争が終わった日、はばかり事なく泣いたに違いない。国民皆が飢え、生きる事に必死だった日をどう生きていたのだろうか。戦争は庶民の暮らしを破壊した。建て直すのに多くの月日を要した。



真っ赤な夕日

あの日から数十年過ぎたのに、真っ赤な夕日を見ると、幼い日の数々の出来事が思いだされる。故郷の風景と共に。

あの時の駅（宮口駅）は無人駅になって、そのままの駅舎が古ぼけた姿で、まだ、ひっそりと建っている。



宮口駅プラットフォーム